今を決めたあの時 第20回

川崎和男

デザインが明日を救う

吉永みち子・文 赤城耕一・写真
text by Michiko Yoshinaga photographs by Koichi Akagi

【かわさき かずお】
デザインディレクター、医学博士。1949年、福井県生まれ。金沢美術工芸大学卒業後、東芝勤務を経て79年に独立。生活用品から情報機器、福祉・医療分野まで幅広いデザインを手がけ、国内外で高い評価を得る。99年、人工心臓のデザインで医学博士号を取得。現在、大阪大学大学院教授。

「四七歳になった時、亡くなった母より長く生きるのなら、これからは生き方を変えようと決めたんです」

企業デザイナーとして活躍していた二八歳の時に遭遇した交通事故で、あまりにも多くのものを失った。心臓発作で生死の境をさまよったこともある。命と向き合う体験が、新しいデザイン分野への挑戦につながった。

ドアをノックする音がして、川崎和男が軽やかに部屋に入ってきた。軽やか、と感じたのは、車椅子の白い車輪に入った赤いラインが流れるように動いて、「あ、きれい！」と思ったから。川崎のデザインによるCARNA（生活の女神）と名付けられた車椅子は、世界一軽くて、持ち運びに便利で、エアシート状のロホクッションで座り心地もいい逸品。ニューヨークの近代美術館に永久展示品として収蔵されている。「昨日、たくさんの友人たちが還暦のお祝いをしてくれてね」と言いながら浮かべたちょっと照れた笑顔に、すっと緊張感がほぐれる。緊張が消えて初めて、川崎に会うことに緊張していた自分に気づかされた。

著書の一冊の『デザイナーは喧嘩師であれ』というタイトルから、相当に頑固な人というイメージができていたせいか、これまで歩んできた壮絶な人生への畏れのせいか、川崎の生み出すものに惹かれるものの溢れる横文字や高度な計算式に臆したせいなのか……。

パウエル元米国務長官、女優のウーピー・ゴールドバーグ、最近では共和党の副大統領候補だったサラ・ペイリンなどが愛用する眼鏡をデザインした人ということで、川崎の名前がいきなりマスコミに取り上げられたが、眼鏡は川崎が生み出してきたもののほんの一部でしかない。

インダストリアルデザイン、プロダクトデザインを手がけるデザインディレクター。専門はトポロジー空間論によるメディアインテグレーション。手法とそのデザイン開発。川崎を紹介する文章は、ほとんど横文字で表わされると同時に、とてつもなく難解そうで途方に暮れるが、そこに眼鏡や車椅子という製品が出てくると、やっとその一端に触れることができる。

刃物、たわし、眼鏡といった生活に密着したものから、コンピューター、モニター、さらに人工心臓、原子力エネルギー機器まで、デザイナーの既成概念をぶっ壊す幅広い分野で川崎のデザインしたものが息づいているのである。

テーブルの上のパンフレットは、PKDと書かれたパラシュート箱の写真。箱の中身はワクチン。折り畳んである台紙を広げると、注射針と二〇円玉ほどの大きさの樹脂でできた容器に入った一回分のワクチンが出てくる仕組みで、そのまま使用できるので誤って針を刺してしまう事故も防げるし、医師でなくても使用できる。使用後はUSEDと書かれた面で封印され使い回しもできない。医療設備の整わない途上国で簡単に安全にワクチンの接種ができるデザインシステムの提案は、二〇〇六年二月に大阪大学のPKDプロジェクトの成果として発表されたものだ。

PKDとは「ピース・キーピング・デザイン」の略で「デザインの力による真の世界平和実現」を目指すプロジェクトである。大阪大学大学院教授でもある川崎の研究室と、同大学医学部附属病院の未来医療センターが協力して推進している。単に製品を作るだけでなく、運搬、保存、管理、使用、回収までをトータルに考え、これまでの固定観念を超えた注射器やキャリーケース、効率のいい運搬用段ボールなどすべての設計、デザインを手がけることで、ワクチンが十分に生かされる総合的な提案である。

「今、鳥インフルエンザの変異による新型ウイルスのパンデミック（感染爆発）が恐れられているけど、五、六年前から怖いなあと思っていることがあるんですよ。地球温暖化によって、地球の温度が二度上がると、一日に三〇〇〇～五〇〇〇人の命が消えると言われていますよね。これまでにない感染症が生まれてくる危険や、鳥インフルエンザにマラリアなどが結合した突然変異も考えら

＊メディアの利用・応用とその効果を合目的化・総合化すること

「ひととき」MAY 2009 Vol.9 No.5

Kazuo Kawasaki Ph.D.

れる。途上国ではワクチンの管理の不備や、使い回しや中味の抜き取りなどで、せっかくのワクチンが廃棄されることもあるんです」

ワクチンを無駄なく安全に使うことはワクチンを生かすことであり、それは人々の命を守ることにつながる。ワクチンを開発する医療と求める人々の間をデザインがつなぐことで、救われる命が増える。

「人が生まれてから死ぬまでを幸せに生きるのに、デザインがどう介在していくのか。〝かたち〟を見て〝きもち〟が動かされて〝いのち〟が息づく。命と向き合うデザインをきちっとやっていきたいんですよ」

多岐にわたる分野で活躍している川崎が、そのまなざしで確かに捉えている光がやっと具体的に見えてくるような気がする。

「実はね、三度目にあの世からこの世に戻ってきた時に、ワクチンに取り組もうと思ったんです。敗血症でまた死にかけてね。意識がなくなる時ってすごく気持ちがいいんですよ。祖父が出てきて、もう来るか？って言うんで、もういいかな行こうかなと思ったら、僕が二一歳の時に死んだ母が出てきて『ダメよ！　まだやり残していることあるでしょ』って言った。耳元で若いドクターが『阪大病院の天井どうするんですか』とか怒鳴っている声も聞こえて、ふと意識が戻る。ストレッチャーで運ばれる時って天井しか見えないのに、貧弱な天井なんですよ。そういえば天井をデザインしたいねっていつも言ってたっけなと思い出す。あ、まだあっちに行けないなって思うと、吐き気に襲われて、次に寒気がきて、今度は熱がガーッと上がって、もう一回気を失う。で、気がつくと二週間ぐらいたってる。いつも同じパターンです。この世に戻ってくるって辛いんですよ。戻ってくる度にハッと自分の中でやるべきことに気づくというのかな。今度も、ワクチンだ！　って准教授を呼んで宣言して、スケッチを描き始めた」

あの世への道案内ができるよと笑う川崎は、これまで何度も命の危機にさらされている。最初に死線をさまようことになったのは、二八歳の時の交通事故だった。

幼い頃、作家志望だった川崎は、東大と防衛大学以外への進学は認めないという父を、医学部を希望することで妥協させ、浪人の末に金沢美術工芸大学に進んだ。当然ながら父親は怒ったが、一人息子の適性を深く理解していた母は「赤い血を見て一生暮らすより、赤い絵の具を見て暮らす方があなたには絶対に似合っている」と父との間を取り持ちながら応援してくれた。

美大でデザインの才能を開花させた川崎は、東芝に入社。オーディオ機器のデザインを手がけ、順調にサラリーマンデザイナーの道を歩き出していた。仕事は面白く、上司にも恵まれ、バリバリと働いていたそんな時に、帰宅途中で乗っていたタクシーが追突されるという事故に見舞われたのである。一命は辛うじて取り留めたが、脊髄を損傷したことによって医師から一生歩けないという宣告を受けた。

「最初は実感がないというか、車椅子もあるし、何かズルもできそうだしって楽観してたんです。でも、企業留学が決まっていたのに、それが流れて、同期の人間が明日から留学するって言ってきた日は病院で泣きました。なんで自分はこんな目に遭っているんだろう。何でだろう何でだろうって、仏教書や宗教書を読んだりもしてましたが、どうしても現実が受け入れられなかった。でも、ある時、何度もお見舞いに来てくれた上司が帰る後ろ姿を見送っていて、もしあの人が自分と同じように入院したとして、自分は親身になって何度もお見舞いに行くだろうかって思ったんです。きっと行かないだろう。自分は、あの人のようなやさしさのない人間なんだ。だからこんな事故に遭ったんだ。しょうがないんだなって思った時、これからこの体で生きていく人生が受け入れられたように思います」

「病を病とす、是を以て病あらず」という老子の言葉があるが、自分の病を病と認めた時に、病は消滅してしまう。他から癒されるのではなく、癒される元を自ら飲み込んで消し去ってしまった川崎は、「統計学的に言うと、あと一二年くらいしか生きられない」という医師の心ない言い方もはねのけて、リハビリに励んだ。

「東芝には医療機器部門もあり、その図書館から最新のリハビリの本を上司が借りてきてくれて読んだんですよ。そうしたら『リハビリとは諦めることだ』って書いてあって、これ、ショックでしたね。でも、よく読むと、歩くことに近づけるのではなく、歩くことを諦めて、残っている機能を鍛え上げるってことだったんです」

この最初の試練は、社員デザイナーという川崎の立場を変えた。川崎の才能を高く評価していた音響メーカーがスポンサーとなって、赤坂に個人事務所を設立して独立。その結果、たくさんのヒット作品を手がけ、金銭的には飛躍的に豊かになった。

「三日働いて二〇〇万円入ってきたりして、一〇人くらい人を雇い、外車を乗り回すような暮らしでした。でも、気が向くと徹夜を続けたり不規則な生活をしているから、いつも熱を出したりしていたんです。どこかで、どうせ四〇歳までしか生きられないって思っていたんでしょうね。でも、いつも励ましてくれていた医師が、ある時言ったんです。『このままでは長生きできないから田舎に帰れ』って。迷っていた頃、ジョン・レノンが撃たれて死んだんです。ビートルズ世代ですから、もう東京での青春は終わったと思って、故郷に帰ろうと心が決まりました」

昭和五六年の「五六豪雪」に埋もれていた故郷の福井に帰ったのは、三二歳の時。

何でもある東京から、仕事もない福井での生活。友人が探してきてくれた生ナメコのパックのデザインをしながら、川崎のデザイン観が変わっていった。東京にあって福井にないものを追うのではなく、東京になくて福井にあるものを求める。どこから見るか、何を見るかの視線の先に、越前打刃物があった。伝統工芸の世界にデザインという風を通すことで、現代に甦らせる。デザイナーと聞いただけで拒否反応を顕わにする職人たちのもとに通い詰め、東京ばかりか海外でも評価される製品を作り打刃物の一大産地にすると説き続け、ステンレスとステンレスの間に鋼を挟み込んで錆びずに美しい切れ味を実現したキッチンナイフを作った。

「ネギひとつ切るにも、本当に切れ味の優れたものは、ネギの旨味をいっさい損なうことなくスパッと切る。ステンレスの板を削っただけの文化包丁は、刃物じゃないんです」

美しい包丁は、切られる側をも生かす。刃物とは何なのかとトコトン考え抜くから、ひとつの製品を作り上げた時には、本一冊書けるほど深くその世界と関わる。たわしを作る時にも、洗うということは何なのかと哲学する。そこから人と物とのコミュニケーションが生まれる。

地場産業再生の見事なモデルを故郷で作り上げただけでなく、故郷でコンピューターと出会ったことが、川崎を新たな世界に誘うことになった。コンピューターによって広がる世界への関心がピークに達した時、名古屋市立大学に芸術工学部が新設されることになって、川崎は教授として招かれた。

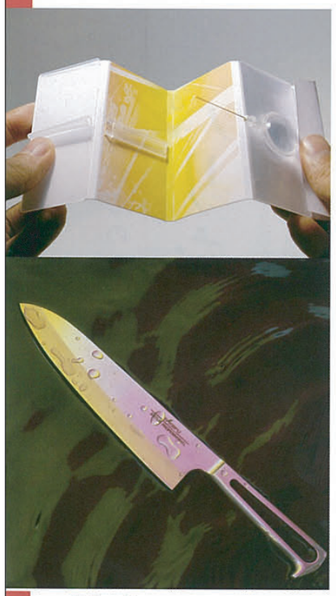
「四七歳の時でした。四六歳の時に、事故の後遺症で大動脈瘤が石灰化して心臓発作が起き二度目の死線を乗り越えたばかり。四七歳で亡くなった母よりも長生きするんなら、これからは生き方を変えようと思って、大学人になりました。二億円の光造形システムを整備してもらって、メビウスの輪とかクラインの壺といった想像上の造形を現実に作り出すことに成功しました。それで何が可能になるのかとアメリカの学会でのプレゼンで聞かれ、とっさに人工臓器と答えちゃった。どの臓器だと重ねて聞かれたので、心臓だって言って、それなら来年作ってこいということになっちゃってね」

そこから猛烈に心臓に迫り、約東通りに人工心臓のデザインモデルを造り上げ、その功績が認められて医学博士号を取得した。全置換型人工心臓「KAWASAKI G5-MODEL」は、昨年一二月に東大でヤギの体内へのインプラント手術が行われ、その性能と機能の動物実験に入った。医学と工学の連携にデザインが加わることで、人工臓器や再生医療の分野に新しい希望が生まれる。

「感染症やエイズや人種差別、そしてアルツハイマーにデザインの観点からどう切り込んでいけるか。世界を変える力がデザインにはある。それならデザイナーがしっかり発信すべきだと思う」

デザインは明日をつくること。明日の世界のあり方を考えること。人の幸せとは何かを問いかけること。辛いこの世に戻ってくる度に、川崎の生み出すカタチは人の命と幸せにさらに深く寄り添っていく。すさまじい勢いで溢れ出す言葉は、二度ならぬ三度までも自らの明日を強い意志で取り戻したエネルギーが、川崎の中でたぎっている証拠なのだろう。

[よしながみちこ]
1950年、埼玉県生まれ。85年、「気がつけば騎手の女房」で大宅壮一ノンフィクション大賞を受賞。著書に『母と娘の40年戦争』(集英社文庫)、『怖いもの知らずの女たち』(山と渓谷社)などがある。



上／パッケージと注射針が一体となったワクチンシステム
下／伝統的な越前打刃物にモダンデザインを融合させたキッチンナイフ

「ひととき」MAY 2009 Vol.9 No.5

Kazuo Kawasaki Ph.D.